

第3章 ユドヨノ政権期における政治・宗教市場と 新たな指導者の模索

見市 建

要約：

イスラームと政治および社会の関係をめぐって、この10年ないし15年あまりの期間において顕著なのは、相反するような印象を与える現象である。すなわちイスラームの規範が社会の隅々に浸透し、より敬虔あるいは保守的な人々が増えているように見える一方で、既存宗教組織や指導者の政治的動員の限界が露呈し、イスラーム政党は停滞していることである。代わって都市部を中心に既存の組織に囚われない新たな集団や指導者が現れている。本稿はインドネシアにおける1998年以降の宗教市場および政治市場を分析し、ジョコ・ウィドド大統領候補台頭の背景を明らかにするとともに、2014年選挙を分析するための枠組みを示す。なお、本稿はアジア経済研究所「インドネシア選挙研究会」の中間報告書である。

キーワード：

イスラーム、インドネシア、政治

はじめに

スシロ・バンバン・ユドヨノ大統領は内外に向けて繰り返し、民主主義と経済発展そして穏健なイスラームの共存をアピールしてきた。とりわけ2011年初頭のいわゆる「アラブの春」に際して、インドネシアはイスラームと民主主義両立のモデルとなりうると自信をのぞかせている¹。またユドヨノの与党民主主義党は2009年総選挙で「宗教的ナショナリスト」を掲げ、ユドヨノの個人人気を背景にイスラーム系政党の地盤を切り崩して躍進した。同党は2014年総選挙でもこのモットーをそのまま引き継いでいる。

では、ユドヨノが大統領を務めた10年間に、イスラームと政治はいかなる関係にあった

¹ 例えば以下のCNNとのインタビューを参照。“Indonesia’s president: ‘We can be model for Islam and democracy,’” CNN.com, June 16, 2011.
<http://edition.cnn.com/2011/WORLD/asiapcf/06/15/indonesia.president.yudhoyono/> (2014年2月26日閲覧)。

のだろうか。あるいはもう少しタイムスパンを広げて、1998年の民主化以降インドネシアのイスラームと政治の関係はどのような変化を遂げてきたのだろうか。ここでいう政治の主体や舞台は、大統領や国会といったフォーマルな制度のみならず、在野の政治運動、マスメディアやインターネットを含む。イスラームと政治および社会の関係をめぐって、この10年ないし15年あまりの期間において顕著なのは、相反するような印象を与える現象である。すなわちイスラームの規範が社会の隅々に浸透し、より敬虔あるいは保守的な人々が増えているように見える一方で、既存宗教組織や指導者の政治的動員の限界が露呈し、イスラーム政党は停滞していることである。代わって都市部を中心に既存の組織に囚われない新たな集団や指導者が現れている。

こうした矛盾を読み解くためのキーワードは「商品化」と「標準化」である。政治や宗教のより自由な市場の発達によりイスラームが「商品化」され、他方でグローバルなイスラーム復興潮流のなかで「標準化」されているのが現在の特徴である。正統なスンナ派伝統への標準化によって、少数派の「異端」への圧力は高まっている。とくに近年では、創設者が預言者を名乗ったことで異端視されているアフマディヤやシーア派が攻撃対象になっている。他方で、異端の心配がないものはいわば無節操にメディア・コンテンツとして商品化される。宗教行為が「商品」として拡大する中間層に消費されるとともに、政治家がその宗教イメージを利用して自らを売り込もうとしている。とくに選挙においてメディアを中心に形成されるイメージがますます重要になっている。民主主義者党が第一党に躍進し、ユドヨノ大統領が大差で再選された2009年選挙でその傾向は極めて明確になった(本名 [2013])。各党は候補者選定の段階から世論調査を用い、選挙運動においてもコンサルタントが戦略を練る。インターネット上のソーシャルメディアの分析や発信に携わるチームも編成される。2014年選挙の大統領候補筆頭ジョコ・ウィドド(現ジャカルタ州知事)はまさにこうした政治的マーケティングによって生まれた。

本稿は、流動化するインドネシアの政治や宗教の「市場」を分析し、近年のインドネシアにおけるイスラームをめぐる政治の特徴を明らかにする。具体的には、1998年以降に新たな政治主体として登場した福祉正義党、宗教的なメディア・コンテンツの分析を通して、イスラームの多様な商品化とその政治的な帰結を明らかにする。結論を先取りすれば、標準化された宗教的シンボルが強調される傾向が強まったことによって「世俗」の領域が狭まり、逆にイスラーム政党は「世俗」ナショナリスト政党との差別化が困難になった。新たな市場で台頭しているのは機敏に市場動向を捉えた宗教および政治指導者である。

本稿の構成は以下の通りである。まず、インドネシアにおける政治と宗教の関係あるいはその「市場」の基本構造と歴史的な成り立ちを確認し、そうした構造にどのような変化が起こっているのかを明らかにする。次にそうした社会の構造変化を突いて登場した福祉正義党の拡大とその限界の原因を探る。では、民主化以降の宗教市場はどのようなものであり、それは政治市場といかに関係しているのか。映画を中心としたメディア・コンテン

ツのイスラーム化と宗教行為の商品化、およびそれぞれと政治との関係について明らかにする。以上の記述は、これまでのユドヨノやジョコ・ウィドドの、とくに宗教に関連した政治的なイメージ作り、を参照しながら行われる。最後に 2014 年選挙を分析するうえでのいくつかの論点を提示したい。

第 1 節 インドネシアにおける政治・宗教市場の基本構造とその変化

インドネシアの人口 2 億 4 千万人の約 9 割がムスリム（イスラーム教徒）であり「世界最大のムスリム人口」を誇る。しかし、インドネシアは「イスラーム国家」ではなく、建国五原則パンチャシラは公認宗教を平等に扱う。また毎日の礼拝やラマダン（断食月）の宗教的義務を欠かさず、少なくとも金曜日にはモスクで集団礼拝を行うような敬虔なムスリムは全体の 4 割程度で、そういう人々はイスラーム政党を支持する、と考えられてきた。独立後最初に行われた 1955 年総選挙では、世俗の国民党と共産党、イスラームのマシュミ党とナフダトゥル・ウラマー（以下 NU）がそれぞれ 2 割前後の得票を分け合った。合計するとイスラーム政党の得票が 44 パーセントほどであった。この世俗とイスラームの二分法がインドネシア政治の第 1 の基本構造として、政治の分析や戦略を練るうえで現在までつねに念頭に置かれている。第 2 に、ジャワ島を中心とした伝統的指導者を中心とする NU の伝統主義と、伝統的な慣習や指導者への追従を批判した近代主義（改革主義）の二分法である。後者を代表する宗教組織がムハマディヤであり、政治的には 1950 年代のマシュミ党である。なお、インドネシアの宗教組織は国家や政党からかなり自律的に組織化されており、また実に多様である。NU とムハマディヤの「二大組織」も組織としての凝集性には欠けており、とくに NU は「一国一城の主」たる地方指導者（ウラマー [法学者]、ジャワではキアイという尊称で呼ばれる）の寄り合い所帯である。こうした基本構造とその揺らぎが、インドネシアにおけるイスラームと政治、社会の関係を理解するための鍵となる。

1966 年から 42 年にわたって続いたスハルト体制は、1965 年の共産党クーデター未遂事件とその後の 50 万人ともいわれる犠牲者を出した共産党員粛正による社会的な混乱を経て成立した。共産党は物理的に消滅、スカルノ初代大統領の母体であった国民党も解体され、世俗やキリスト教政党は民主党にまとめられた。唯一存在を許されたイスラーム政党は「開発統一党」というおおよそイスラーム的ではない名前を押し付けられ、また NU と旧マシュミ党の内部対立を抱えていた。こうして与党のゴルカルがつねに 6 割以上を得票する翼賛的な仕組みが作られた。公認宗教間の平等の根拠となっているパンチャシラは政党やイスラーム団体などの社会勢力を支配するための「踏み絵」に使われた。1985 年前後には法律によってすべての政党や大衆団体はパンチャシラを「唯一の組織原則」として明記することが定められた。

しかしながら 1980 年代末頃になると、社会のイスラーム化が顕著になった。例えば、女性のベール着用者が明らかに増加し、日常的にアラビア語の挨拶が使われるようになった。職場や学校に礼拝所が作られるようになり、メッカ巡礼者は大幅に増加した。この国内的な背景としては、「無神論者」とみなされた共産党員肅正の恐怖から、より明確に特定宗教への信仰を示す必要があったことがいわれている。より顕著なのは世界的なイスラーム復興あるいは他宗教を含めた宗教復興の影響である。都市化によってそれまでの地域共同体から切り離されたこと、近代化とナショナリズムのイデオロギーが色あせたことなどが、宗教復興の一般的な理由として説明されている。それまで世俗色の強かったエリート校のインドネシア大学やバンドゥン工科大学でもベールを着用した女子学生が目立つようになった。地方でも土着の信仰と深く結びついた混淆的なジャワ神秘主義は徐々に影を潜めるようになった。イスラームのなかでも、魔術や土着的な習慣についてはこれを忌避するなど、スンニ派の正統な伝統へ「標準化」の傾向が強まった²。こうした傾向に対して、スハルト体制もイスラーム銀行やムスリム知識人協会の設立、大統領の大規模なメッカ巡礼などで親イスラームの姿勢をみせた。1980 年代半ばまでの宗教市場は政府の厳しい統制を受けていたが、都市部を中心に市場は拡大し、むしろ政府の方が受動的な立場になった。

こうした状況下で 1997 年から 98 年にかけてアジア経済危機が起こり、32 年続いたスハルト体制が崩壊した。二大イスラーム組織である NU とムハマディヤの指導者らが設立した民族覚醒党と国民信託党は、世俗ナショナリズムを代表する闘争民主党とともに「改革派」と呼ばれた。1955 年総選挙の政治地図が思い出され、イスラーム政党の復活が見込まれた。選挙の結果、第 1 党になったのはスカルノ初代大統領の娘メガワティ・スカルノプトリが党首を務める闘争民主党であった。民族覚醒党は NU の影響力が強いジャワ島最東部で圧倒して 3 番目の得票だったが、議席数ではスハルト体制期からの地盤を維持した開発統一党が上回って第 3 党となった³。イスラーム政党の合計得票は 38 パーセント弱で、1955 年には及ばなかった。スハルト体制期に強力な地盤を築いたゴルカルが民主化後も党勢を維持し、とりわけジャワ島の外で強さを見せたからだ。ゴルカル党は、1999 年は第 2 党、メガワティ大統領と闘争民主党への失望が広がった 2004 年総選挙では第 1 党に復帰している。ゴルカル党が制したスマトラ島やスラウェシ島は 1955 年にはイスラーム政党のマシュミ党が圧倒した地域であった。2009 年総選挙では、ユドヨノ大統領個人の人気を背景に民主主義者党が「宗教的ナショナリスト」を掲げて第一党となったのは本稿の冒頭で述べたとおりである。イスラーム政党はといえば、次節で述べる福祉正義党の躍進によって、2004 年こそ合計得票 38 パーセントを維持したものの、2009 年総選挙では 28 パーセントま

² Hefner [2011]はこうした現象をイスラームに限らず東南アジア各地で見られる「宗教化」と呼んでいる。ただし、隣国のマレーシアに比較するとインドネシアでは依然として魔術を含む非正統的な習慣の存在余地がはるかに大きい。

³ 前述のとおり開発統一党も NU メンバーを多く含むが、既得権益や民族覚醒党指導部への反発から新党に合流しなかったものも少なくない。

で落ち込んだ。

1998年以降の宗教市場は、政府の介入から自由になって活発かつ多様化した。既存の組織に囚われない集まり、あるいは個人による宗教に伴う消費市場が大幅に拡大した。30年あまりのスハルト体制の支配の間に、社会のイスラーム化が進んだ一方で、敬虔さと政党支持は必ずしも一致しなくなった⁴。また多宗教共存を前提とするナショナリズムも浸透した。政策面でもイデオロギーの中道化が顕著である (Mietzner [2008])。これまでイスラーム政党間の差異を無視して話を進めてきたが、実際には二大イスラーム組織が設立した民族覚醒党と国民信託党は党名に民族/国民を掲げ、党原則にパンチャシラを採用して国民政党を目指した。逆に、最も世俗的だと見られてきた闘争民主党ですら、2009年総選挙を前にムスリム部門 (Baitul Muslimin [ムスリムの家]) を設立している。さらには、インドネシアの宗教的保守化を示す事例としてしばしば指摘される地方自治体におけるイスラーム条例の制定が、イスラーム政党だけではなく、しばしばゴルカル党や闘争民主党の政治家による支持調達的手段となってきたことも明らかになっている (Bush [2008])。世俗政党とイスラーム政党の差異は以前ほど明確ではなくなった。

2009年総選挙におけるイスラーム政党停滞の最大の原因は、東ジャワ州を中心とした民族覚醒党の内紛による党の分裂である。投票のボイコットなどにより2004年の10.6パーセントから4.9パーセントに半減した。他方、イスラーム政党の割合が最も劇的に低下したアチェ州では、地方議会に限って認められた地域政党のアチェ党が圧勝し、国政選挙では民主主義党、大統領選ではユドヨノに支持が集中した。アチェ党との「取引」があったとみられている。

イスラーム政党の内部でもゆっくりとだが着実に変化が起きている。政治的動員を支えてきた伝統的な宗教指導者の影響力低下である。ジャワではキアイと呼ばれる宗教指導者は、日常生活から社会問題まで権威ある見解を示す法学者 (ウラマー) と多数の生徒を抱える宗教寄宿学校 (プサントレン) の経営者であると同時に、魔術的な能力を持つと信じられるカリスマであり、地域によっては大土地所有者である。アラビア語で「ウラマーの覚醒」を意味するナフダトゥル・ウラマーはこうした指導者と彼らが体現する宗教的伝統に従う人々の緩やかな連合体である。中・東ジャワを中心とし、世論調査をすればムスリムのおおよそ3割がNUへの帰属意識を持っていると答える (見市 [2013])。キアイは幅広く社会の尊敬を集め、彼らの政治的支持が選挙の行方を大きく左右する。しかしながら、民主化後の政治への関与やそれに伴うキアイ同士の権力争いへの失望、社会の多様な価値観の広がりによって、彼らの影響力にも陰りが見えている。既存の宗教組織の凝集性は弱くなり、その特定政党との結びつきもより流動化している。

⁴ 見市 [2012a] は世論調査を用いて、敬虔さ (礼拝、断食、集団礼拝への参加などの頻度) と政党支持の相関関係を明らかにしている。国民信託党を除くイスラーム政党では両者に相関関係を見いだせた一方、世俗政党で負の相関があったのは闘争民主党のみであった。

では、イスラーム票はどこへいったのだろうか。まず 1998 年以降に台頭し、新たな宗教市場を開拓しようとした福祉正義党の拡大とその限界から考えてみよう。

第 2 節 福祉正義党の台頭とその限界

イスラーム政党のうち民族覚醒党や国民信託党、開発統一党あるいはその他の新政党のほとんどは 1955 年総選挙のときにはすでに存在した社会勢力—つまりは既存のパイを奪い合うことを想定していた。すでに述べたように民族覚醒党と国民信託党は「国民政党」を目指したが、NU とムハマディヤという既存の大衆基盤に依存している。とくに民族覚醒党においてその傾向が顕著である。例外的に新たな宗教市場を開拓したのが福祉正義党である。本節では同党がいかに有権者にアピールをして台頭し、いかに限界を迎えたのかを明らかにする。1998 年以降のイスラームと政治の関係を知るうえで重要な指標となるからである。

福祉正義党（1998 年の結党時は正義党）はスハルト体制期、とりわけ 1990 年代にさかんになった大学キャンパスにおける宗教運動を基盤とする。エジプトを発祥とするイスラーム同胞団の思想と組織論に大きな影響を受けている。すなわちイスラーム個人としての宗教的な目覚めから、家族、社会、国家と順に、公正なイスラームの教えの実現を目指す「世直し」運動である。狭義の信仰のみならず、生活規範から大学の勉強、政治イデオロギーまで共に学ぶ 10 人程度の小集団による勉強会の形式が全国の大学に広がって組織化された。1998 年のスハルト大統領退陣を求めた学生運動の一組織として表舞台に登場すると、政変からほどなく政党が設立された。学生運動としても 98 年以降拡大を続け、スハルト体制下でゴルカルへの人材供給を担っていた既存のイスラーム学生運動（HMI）に並ぶ最有力組織になった。高校での党員養成も活発である。福祉正義党は労働組合や農民運動を組織し、また党員が運営する企業や学校も党を利している。とくに宗教教育も充実した進学校の経営がビジネスとして成功している。

正義党の得票は 1999 年総選挙では 1.4 パーセント（7 議席）に留まったが、その後の 5 年間で若くて清廉潔白なイメージが浸透した。地方議会における汚職の告発や、無料医療サービスや災害救援などの社会活動が評価された。2004 年には 7.3 パーセント（45 議席）を獲得、首都ジャカルタでは実に 23 パーセントを得て第 1 党になった。既存の組織や伝統的指導者に動員を依存する民族覚醒党や開発統一党が選挙のたびに得票を減らすのとは対照的であった。しかし、「三大政党入り」を目指した 2009 年総選挙では 7.9 パーセント（57 議席）と微増に留まった。当時福祉正義党幹部たちはユドヨノ大統領の民主主義者党ブームに押されて浮動票を得られなかったと述べていた。しかし彼らのイメージ戦略が模倣されて新規性を失い、また連立政権に参加することでその存在が埋没してしまったことは明らかであった。2004 年以降、地方首長選挙で相乗りするに当たって、票固めのための「経

費」を他の政党に請求する、といった話もあちこちで聞くようになった。2013年には党首が関与した牛肉の輸入割り当てをめぐる汚職事件が大きなイメージダウンとなった。しかも党首の「友人」で金のやり取りを取り仕切っていた仲介者の派手な女性関係がセンセーショナルに取り上げられた。汚職への関与はどの政党でも見られるが、清廉潔白を売りにしてきた同党にはとりわけダメージが大きかった。2014年2月の世論調査でも支持率は3.7パーセントと低迷している（LSI [2012]）。

福祉正義党はその党勢が拡大するとともに、支持者のウイングを広げようとイメージチェンジを図ってきた。1998年の民主化運動においては、男女ともに敬虔さを象徴する「白装束」で鮮烈な印象を残した。翌年の総選挙でも「宣教政党」を謳い、「ウンマ（イスラーム共同体）の一体性こそが民族の一体性のための最も重要な里程標」とイスラームを国民国家より優先する立場は明確であった（見市 [2004:88]）。パレスチナやイラクに対するイスラエルやアメリカの攻撃に抗議をして大規模な街頭デモを行い、反ポルノ法の成立推進を典型とする道徳的な問題の重視など、イスラーム運動であることを強調した。党の公式サイトをみると現在まで「宣教」（ダアワ）の文言は残っている。

しかしながら、福祉正義党が一般に訴えかけようとするイメージは大きく変わった。つきまとう排他的な印象を打ち消そうとしたのである。すなわち、黨員同士の結婚の奨励といった閉鎖性、積極的な勧誘活動に伴うモスクの「乗っ取り」といったもめ事、現状のインドネシア国民国家を否定してイスラーム国家樹立を目指すイデオロギー（を持っているかもしれないという疑念）、がこれまで党外の不信感や批判の材料になってきた。2005年に第二代党首ヒダヤット・ヌルワヒドが国民協議会議長に選ばれると、現状のインドネシア共和国の統一（NKRI）が国家の最終形態であることを強調した。2008年2月には「開かれた政党」となることを宣言し、翌年の総選挙では非ムスリムの候補も立てることを明らかにした。党のテレビコマーシャルではベールを着用しない女性や長髪の青年が登場し、カジュアルなイメージを演出した。ナショナリズムを強調し、国家の英雄としてスハルト元大統領や、NUとムハマディヤの創設者が登場するコマーシャルも作成した（これはかえって反発を招いた）。NUが体現する宗教伝統やインドネシア土着の文化を重視する姿勢もみせた。2011年にジョグジャカルタで行われた党大会では、ジャワの伝統衣装を着た指導部のポスターが街中を飾った。2014年総選挙に向けた党のスローガンは「愛、実行、調和」（Cinta, Kerja, Harmoni）であり、それまでの「清潔、（社会問題などへの）ケア、プロフェッショナル」（Bersih, Peduli, Profesional）より「温和」な印象を与えようという狙いが見える。実際に非黨員の国会議員や地方支部を訪ねると、1998年当時とはかなり違った「開かれた」印象を受けるようになった。しかし党外のとりわけNUやムハマディヤ、ナショナリストの学生運動出身者などには依然として強い拒否反応がある。

福祉正義党はイデオロギー性を薄めて一般の「宗教市場」に適応していく戦略を採った。唯一イスラーム法の適用を党綱領に明示した月星党が3度の総選挙で事実上消滅してしま

ったことを考えれば、他に選択肢はなかったであろう。そもそもイスラーム法の厳格な適用やイスラーム国家の樹立といった政治的イデオロギーは、一般の黨員に必ずしも明確に提示されてこなかった（見市 [2012b]）。それでも 2009 年総選挙は同党の限界を示していた。先に述べたインドネシア政治の基本構造と 1998 年以降の新たな体制が大きな壁となって立ちふさがった。第 1 に、停滞傾向とはいえ既存の諸宗教勢力が長年政治活動を行っており、新規参入者の福祉正義党がこれらの垣根を超えてイスラーム勢力を結集するのは極めて困難であった。むしろ NU と ムハマディヤが手を結んで福祉正義党への警戒心を露わにし、同党をインドネシアに異質な「トランスナショナル」な運動であると位置づけた⁵。第 2 に、連立政権を常態化させるような選挙制度により、他の政党と同様の行動様式を採らざるを得なかったことである⁶。無論、少数野党として洗練潔白を押し通す選択肢はあったはずである。この点では、党勢の拡大を急ぎすぎたのが「敗因」だったともいえるだろう。

それでも福祉正義党が 2009 年総選挙では最大のイスラーム政党にまでなったことは、民主化後のインドネシアにおける新たな政治市場と宗教市場の登場を意味していた。では新たな政治市場と宗教市場とはどのようなものなのか。「世俗」政党やユドヨノ大統領はいかにイスラーム票を「横取り」したのか。それは具体的にどのような社会あるいは政治と宗教市場の変化によって説明できるものなのだろうか。次節では、映画や宗教行為の「商品化」から、新たな宗教市場の中身と政治との関係について具体的に検討していこう。

第 3 節 新たな宗教市場と政治市場

1. 大衆映画にみる宗教市場と政治

福祉正義党が躍進した 2004 年、『愛の章句』（Ayat ayat Cinta）という長編恋愛小説がベストセラーになった。舞台となったのはエジプトのカイロ、主人公はアズハル大学に留学中のインドネシア人男子学生である。敬虔で優しく闊達な主人公は、トルコ系ドイツ人と結婚し、彼に想いを寄せるコプト・キリスト教徒のエジプト人も改宗して第 2 夫人となる。彼はアラビア語も英語も使いこなし、地下鉄でアメリカ人女性に言いがかりをつけたエジ

⁵ NU 元議長のアブドゥルラフマン・ワヒド元大統領、ムハマディヤ元議長のシャフィイ・マアリフの財団などが 2009 年に『イスラーム国家の幻想：インドネシアにおけるトランスナショナルなイスラーム運動の拡大』（*Ilusi Negara Islam: Expansi Gerakan Islam Transformasi di Indonesia*）という本を出版し、福祉正義党を解放党などとともにトランスナショナルな運動と位置づけ、その危険性を指摘した。同書は不正確な記述が多いとして回収されたが、この「トランスナショナル」という否定的な呼称はさまざまな機会に使われ、少なからぬ影響を残した。

⁶ 以上の点は、福祉正義党と同様にムスリム同胞団の背景を持ち、政権奪取まで至ったトルコの公正発展党の「成功例」との対比によってより明確になる。トルコにおいては、他にイスラーム政党が存在せず、既存のイスラーム団体を強力な支持母体とすることができた。また経験豊富な政治家や多くの新興実業家を取り込んだ（見市 [2011]; Hadiz [2011]）。

プト人男性を論破し、そのアメリカ人ジャーナリストにイスラームにおける「公正な」女性の位置づけについて説く。『愛の章句』は2008年に映画化され、360万人を動員して記録的なヒットとなった。同じ作家による『愛が数珠を持つとき』(Ketika Cinta Bertasbih)も2009年に映画化され、シリーズ2作で510万人の動員を記録している。それまでも短編の「イスラーム的」恋愛小説がブームとなっており、一般書店でもつねに平積みされていた。当時ほとんどが女性の作家連盟の大半は福祉正義党支持者だといわれていた。しかし、映画やテレビの恋愛ドラマにおけるベールの着用やイスラームの規範を強調したものは稀だった。『愛の章句』の成功をきっかけに、「イスラーム恋愛ドラマ」はテレビでも定番となった⁷。

『愛の章句』以前の恋愛ドラマの範型は、ジャカルタの中間層の高校生を活写して大ヒットした2002年の映画『愛(チンタ)に何があったのか』(Ada Apa dengan Cinta)であった(『ビューティフルデイズ』という邦題で日本でも公開された)。登場人物たちには、宗教やエスニシティの要素が一切見当たらず、主人公の友人にはムスリムのベールをかぶったものは一人もいなかった。こうした「世俗的」でコスモポリタンな系統も続いており、例えば民放RCTIの視聴率が高い夜6~7時台にはつねに「世俗」と「イスラーム」のドラマが続けて放映されている。では、「世俗」と「イスラーム」の市場が分裂しているかというところ、そうではない。むしろ両者は融合する傾向にあり、これは宗教と政治の関係についても共通している。2009年の選挙を控えたユドヨノ大統領は『愛の章句』をみて「三度泣いた」といい、各国の大使を呼んで上映会まで行った。新たな宗教市場は福祉正義党の独壇場ではなくなっていたのである。その後、ユドヨノの涙はヒット映画の付き物になった。

『愛の章句』と同じ2008年にこれを上回るヒット作となったのが『虹の兵士たち』(Laskar Pelangi)である。1970年代の小さな島にある廃校の危機に瀕した小学校を舞台とし、奮闘する女性の新任教師とともに貧しい家庭の子供たちが生き生きと描かれている。同作はミュージカルにもなり、続編の『夢追いかけて』(Sang Pemimpi、2009年)も成功を収めた。舞台となったのはムハマディヤの小学校であり、劇中でも地域唯一の歴史あるイスラーム学校であることが何度も強調されている。映画の制作会社も1980年代以降のイスラーム出版の中心となったミザン社であった。短編イスラーム小説ブームの火付け役も同社である。しかしこの映画は一般にイスラーム映画とはみなされていない。宗教の要素は「説教臭さ」や「押しつけがましい」ことはなく、おそらくキリスト教徒が見ても違和感を持たない。制作会社ミザン代表のハイダル・バギルは、本作は『愛の章句』が体現するしばしば表面的な宗教行為よりも貧困のような社会問題のほうが重要であるというメッセージを含んでいる」として、また「イスラーム主義でもリベラル派でもない中道」を目指すとして述べてい

⁷ スハルト体制期から民主化後初期のイスラーム映画については下記を参照 (van Heeren [2012])。なお本節の記述は以下の拙稿と一部重複する (見市 [2012c])。

る⁸。

その後、イスラームの要素を含む映画やテレビドラマが多数作られている。その内容は多様化し、単純な「イスラーム映画」のラベル付けがますます難しくなっている。例えば NU が基盤とする寄宿学校を舞台としながら、そこにセクシーな大衆音楽バンドの歌手が登場する『三つの祈り、三つの愛』(3 Doa 3 Cinta、2008 年)、寄宿学校出身の人気ロックバンドが映画のなかでも寄宿生の役を演じる『大丈夫、愛しい人よ』(Baik baik Sayang、2011 年) などである。寄宿学校は現代のインドネシア社会においてエキゾチックな雰囲気演出する舞台として使われている。宗教的シンボルを強調する登場人物の自分勝手な(非宗教的)行いをコミカルに描くテレビドラマ『身分証明書上のイスラーム』(Islam KTP) もロングランになった。多くの作品は宗教的規範を正面から取り上げるよりは、イスラームを不可欠の「アイテム」として舞台設定や日常生活のシーンのなかに埋め込むようになっている。

宗教的要素は特撮を多用したアクション大作でもみられる。世界市場に向けて制作され、日米でも公開された『ザ・レイド』(The Raid, Redemption、2011 年)、その前作『ザ・タイガーキッド〜旅立ちの鉄拳』(Merantau、2009 年) はいずれもイスラームの祈祷から始まる。独立戦争を題材とした『紅白』(Merah Putih、2009-2011 年) 三部作でもイスラームの祈祷に始まり、コーランの引用に終わる。なお独立戦争は各公認宗教を信仰する勇気ある人々による共同プロジェクトという位置づけである。ムスリムだけではなく、スラウェシ島出身のキリスト教徒、バリ島出身のヒンドゥー教徒というようにそれぞれの宗教的アイデンティティが強調される。戦闘のまえや重傷の仲間の回復のためにそれぞれの方法で祈祷を行う、いささか奇妙な、シーンが挿入されている。同シリーズは大統領候補のプラボウォ・スビアントの弟ハシム・ジョヨハディクスモがプロデューサーであった。石炭ビジネスで巨万の富を築いたハシムは兄に多額の選挙費用を提供しているといわれている。映画の制作も一種のプロパガンダを目的としているのであろう。ナショナリズムと強いリーダーシップを強調しつつ、各宗教の祝日にはそれを祝うメッセージを必ず発信するプラボウォのテレビコマーシャルを想起させる。プラボウォのグリンドラ(大インドネシア運動) 党は、2014 年選挙において流動化するイスラーム政党の票田を得ようと地方単位で諸小政党にアプローチをしている。

ただ、強いリーダーシップに一定の「需要」はあるものの、『紅白』三部作を含めた映画の分析から得られるのは「普通の人」の成功譚により大きな需要があるということである。『愛の章句』、『虹の兵士たち』そして 2012 年に大ヒットしたハビビ元大統領の伝記映画『ハビビとアイヌン』ではいずれも主人公が海外で成功する。主人公は決して特別な能力を持ったスーパーヒーローではなく、誠実さや地道な努力が特徴である。ジョコ・ウィドド(通

⁸ ハイダル・バギルとのインタビュー(2011 年 1 月 20 日)。

称ジョコウィ)が地方都市の市長からジャカルタ州知事、そして大統領候補にまでなったのはまさに「普通の人」の成功譚である。2014年2月にはスラバヤ市長トリ・リスマハリニがテレビのインタビューで涙を見せたことで、ソーシャルメディアから人気に火がついた。2004年にユドヨノが大統領に出馬した際も、当時のメガワティ大統領に冷遇され抗議の辞任をしたことが同情を買い、急速な支持率向上につながった。こうした現象は宗教指導者においても同様で、次節に述べるようにカリスマ的なキアイから「身近なセレブ」へと人々の関心は移っている。Van Heeren [2013]は民主化後のドキュメンタリー映画において「権力の声」から「声なき声」に関心が移っているとし、それはテレビにおける一般人のリアリティ・ショーや「セレブ」のゴシップ番組の流行と共通の現象であると論じている。宗教・政治市場の変化も同じように解釈できるだろう。

2. 宗教行為の商品化と政治

イスラーム映画に先んじた2000年前後から宗教的規範や宗教に基づいて現代社会で成功するための秘訣などを分かりやすく説く「セレブ説教師」が登場した(見市 [2004])。それまで断食月にのみ放映されていた宗教番組が、常時視聴率を見込めるエンターテインメントになった。その嚆矢となったアア・ギムが第2夫人と結婚して人気を凋落させたあとも、アア・ギムに代わる説教師が次々と現れ、新たなコンテンツを提供した。神秘主義(スーフイズム)の行として知られるズィクルで有名になったアリフィン・イルハムや歌手でもあるジェフェリ・アル=ブフォリなどである。この2人は人々が体験した超常現象をドラマ仕立てで再現する番組のホストを務め、再現ドラマにも登場した。彼らの番組では、そうした現象にハディース(預言者の言行録)などを用いて宗教的解釈を与える(van Heeren [2012: 173-175])。いわゆるオカルトやホラーは非常に人気の高いコンテンツである。セレブ説教師が登場する上に、イスラームの「標準」から逸脱しないお墨付きを与えることで、視聴者はより安心して番組を楽しむことができるのである。映画や超常現象番組の事例はメディアにおける既存コンテンツ(商品)の宗教化と捉えることができるだろう。

宗教行為が商品化され、テレビのコンテンツになる例も少なくない。なかでもズィクルは商品化のみならず、政治利用がなされている。ズィクルとは元々「記憶」を意味し、神のことをつねに覚えているように、数珠を携えて神の名やコーランの章句を繰り返す行を典型とする。しばしば音楽や踊りも伴い、神への愛とともに参加者の一体感が生み出される。通常は各地のモスクなどにおいて数十人程度で行われる。しばしば涙を流す情熱的なアリフィン・イルハムのズィクルは数千人収容が可能なモスクで行われ、テレビ中継もされた。彼はジャカルタ郊外の高級住宅地に拠点を構え、比較的裕福な人々を対象としていた。

近年、大衆向けのズィクルも大規模になり、その指導者のハビブたちが「セレブ」化している。ハビブ(アラブでは一般的にサイドと呼ばれる)とは預言者ムハンマドの子孫

だとされるアラブ系住民である。ジャカルタなどの地域では以前からハビブが尊敬され、各地のモスクに呼ばれてズィクルや祈祷を先導する役割を担っていた。しかし大規模なズィクルを指導するハビブたちはこれまでよく知られていたわけではなく、芸能人のセレブ同様、テレビ出演などをきっかけに急速に支持者を増やした。主要ないくつかの団体は毎週のようにズィクルを開催し、頻繁にテレビ中継が入る。ムハンマドの聖誕祭(マウリド)などの特別なイベントでは数万人を動員するまでになった。「渋滞を引き起こす」として中間層には評判が悪いが、参加者はその存在を誇示するように団体のロゴが入ったジャケットを着込み、原付バイクで参集する。

ここでもユドヨノ大統領が登場する。2009年選挙に先立ってユドヨノの略称「SBY」を冠した組織(Majelis Dzikir SBY Nurussalam)が各地でズィクルを開催した。大統領選挙ではユドヨノと副大統領候補のブディオノの両夫人がベールを着用していないことがネガティブ・キャンペーンの材料になった。しかしユドヨノはこれまでもたびたび自らの敬虔さを強調し、議会選挙ではそれまでのイスラーム政党の票田の多くですら民主主義者党がトップに立った。

2012年の再選を目指して、当時のジャカルタ州知事ファウジ・ボウォもズィクル組織(Majelis Zikir al-Fauz)を設立し、しばしば人気ハビブのズィクルに参加した。ファウジが初当選した2007年の選挙では福祉正義党が擁立した対立候補に対して、「ジャカルタにイスラーム法が適用される」とのネガティブ・キャンペーンが行われた。しかし再選を目指してズィクルやモスク回りをを行い、イスラームを自らの文化的アイデンティティとする地元ブタウィ人にアピールした。地域によっては、宗教と地元意識やエスニック・アイデンティティが交錯し、政治的な争点になりうる。このため民主化直後の政治的経済的な権益の再編に伴ってエスニシティや宗教間の深刻な紛争がいくつかの地域で起こった。しかし、近年では以下のジャカルタの事例のように選挙における一時的な動員はあっても暴力的な紛争にまで至ることは稀である⁹。

さて、2012年にファウジ・ボウォを破ってジャカルタ州知事となり、一躍大統領候補の筆頭まで上り詰めたのがジョコウィである。中ジャワ州ソロ市の市長だったジョコウィは、ジャカルタ出身ではなく、宗教色が薄く、最も「世俗的」な闘争民主党の支持を受け、華人キリスト教徒の副知事候補と組んだ。他方のファウジ・ボウォはブタウィ人プレマン(やくざ)組織の幹部も務める元軍人が副知事候補であった。このため、ファウジ陣営からエスニシティについての差別的な発言や「同じ信仰の候補を選ぼう」といった宗教的差異を

⁹ Aspinall [2011]はインドネシアにおいてエスニシティの差異が暴力的紛争に結びつくことが少なくなった理由として、自治体の新設による紛争回避、エスニック政党の不在、エスニック組織の弱さ、民主化の定着によるエスニシティを超えた協力関係の存在などを挙げている。またエスニック・アイデンティティの主張は思想的に浅いため継続しないという。たしかに、2012年のジャカルタ州知事選でも、ファウジに投票した有権者の多くは(エスニシティではなく)宗教の差異が投票結果に影響したと答えている(Miichi [forthcoming])。

強調する発言が続いた。また数々のネガティブ・キャンペーンも行われた。ジョコウィの選挙運動は庶民の市場巡りが日課で、これがよく報道され、軽妙な発言が人気に拍車をかけた。しかし実際にはジョコウィ陣営は宗教イメージも重視していた。どの候補も行う主要宗教団体への訪問以外にも、第1回投票の直後にキリスト教徒と噂された母親を伴ってメッカに巡礼し、断食月には彼を支持するハビブを伴って路地で小規模の集会を開き、「セレブ」ズィクル指導者にも面会した。こうしたジョコウィの宗教キャンペーンは必ずしもうまくはいかず、ブタウィ人が多数派の地域ではファウジの得票が上回った (Miichi [forthcoming])。ジョコウィは知事就任後もブタウィ文化の重視の姿勢や、ズィクルへの参加などによって、ジャカルタの地域性や宗教を重視する人々の抵抗感を取り除こうとしている。ただ、ジョコウィの「宗教性」は広くは浸透しておらず、彼が大統領になろうとすれば、「宗教性」はジャワ島外における知名度と並んで副大統領候補選定の重要な要素になるだろう。

おわりに

1990年代以降、イスラームの規範の浸透や宗教的シンボルが強調されるようになり、民主化以降の政治的マーケティングにおいて宗教性は重要な要素になった。それまでの世俗ナショナリスト政党でもイスラームが強調されるようになった。他方で、多くの政党が「イスラーム化」することでイスラーム政党は特異性を失って軒並み停滞するようになった。伝統的指導者の影響力が次第に低下し、新たな市場を開拓した福祉正義党も頭打ちになっている。イスラーム的イメージはイスラーム政党の独占物ではなくなった。ユドヨノ大統領は巧みに自らの「宗教性」を強調してきた。ただ、宗教的な「標準」から逸脱していないことは極めて重要であるものの、あからさまにイスラーム性を強調する商品は広い市場では売れない。映画の分析からはまた、「普通の人」の成功譚が大きな需要を持つことを確認することができた。

2014年選挙は5年前よりさらにイメージが重視されるものになるだろう。新たな政治市場の嫡子であるジョコウィの成功譚が地元の中ジャワ州やジャカルタを超えてどこまで通用するのか、そのためにどのような戦略が採られるのだろうか。イスラーム政党をめぐっては、伝統的宗教指導者の影響力がどの程度まで落ちるのか、福祉正義党がどこまで逆風に耐えうるのか、市場に適応した新たな指導者を見いだすことができるのか、といったことが重要な論点として挙げられる。

参考文献

<日本語文献>

- 本名純 [2013] 『民主化のパラドックス—インドネシアにみるアジア政治の深層』岩波書店。
- 見市建 [2004] 『インドネシア イスラーム主義のゆくえ』平凡社。
- _____ [2011] 「公正発展党（AKP）政権の社会的政治的位置づけ—インドネシアとの比較から」日本国際問題研究所「日・トルコ協議」報告。
- _____ [2012a] 「変わるインドネシアのイスラーム地図」『地域研究』第12巻第1号 159-173ページ。
- _____ [2012b] 「出版業にみる福祉正義党の『市場戦略』」（床呂郁哉・西井涼子・福島康博編『東南アジアのイスラーム』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所217-231ページ）。
- _____ [2012c] 「映画にみるインドネシアの中間層文化、宗教と政治」『アジ研ワールド・トレンド』第204号 20-21頁。

<外国語文献>

- Aspinall, Edward. [2011] “Democratization and Ethnic Politics in Indonesia: Nine Thesis,” *Journal of East Asian Studies*, Vol. 11, pp. 289-319.
- Bush, Robin. [2008] Regional Sharia Regulations in Indonesia: Anomaly or Symptom?, in: G. Fealy and S. White (eds.), *Expressing Islam: Religious Life and Politics in Indonesia*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, pp. 174-191.
- Hadiz, Vedi R. [2011] “No Turkish Delight: The Impasse of Islamic Party Politics in Indonesia,” *Indonesia*, Vol. 92, pp.1-18.
- Hefner, Robert W. [2011] “Where have all the abangan gone? Religionization and the decline of non-standard Islam in contemporary Indonesia,” in Michel Picard and Remy Madinier (eds.), *The Politics of Religion in Indonesia: Syncretism, orthodoxy, and religious contention in Java and Bali*, London and New York: Routledge, pp.71-91.
- LSI (Lembaga Survei Indonesia) [2012] Perubahan Politik 2014: Trend Sentimen Pemilih pada Partai Politik, Survei Nasional, 1-12 February 2012.
- Mietzner, Marcus. [2008] “Comparing Indonesia’s Party Systems of the 1950s and the Post-Suharto Era: From Centrifugal to Centripetal Inter-party Competition,” *Journal of Southeast Asian Studies*, Vol. 39, No. 3, pp.431-453.
- Miichi, Ken. [Forthcoming] “How religious and ethnicity work on the Jakarta’s Gubernatorial election in 2012.”

Van Heeren, Katinka. 2012. *Contemporary Indonesian film: Spirits of Reform and ghosts from the past*, Leiden: KITLV Press.